

## 「経営学・経営の考え方と身につけるべき資質について」

MOT 特任教授 高梨智弘

2012.11.15

時代が変わり、経営の現場で、MOTの価値が高まっていることを、事ある毎に感じている。

先般、経営関連学会協議会の評議員あてに理事長から学会参加の教授に周知するように依頼された日本学術会議の報告書の内容は、まさに新潟大学大学院MOT（技術経営研究科）が志向するMOT創設の趣旨に添っていることに意を強くした。

大学学部の目指すレベルは、そのまま、MOTの当然の前提レベルとなる。以下に、その内容の抜粋を参考に示し、若干のコメントを付したい。

平成24年（2012年）8月31日に発表された日本学術会議、大学教育の分野別質保証推進委員会、経営学分野の参照基準検討分科会報告書「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準—経営学分野—」を参考にすると同時に、MOTの前提知になると思われるので、ここで簡単な考察をしたい。

### (1) 経営学の定義

経営学は、営利・非営利のあらゆる「継続的事業体」における組織活動の企画・運営に関する科学的知識の体系である。営利・非営利のあらゆる継続的事業体の中には、私企業のみならず国・地方自治体、学校、病院、NPO、家庭などが含まれる。  
また、企画・運営に関する組織活動とは、新しい事業の企画、事業体の管理、その成果の確認と改善、既存事業の多角化、組織内における各職務の諸活動である。これらの諸活動を総体として経営と呼ぶ。

MOTの対象が、継続事業体を対象とすることは、論を待たない。MOTの教育の目的が「本研究科は、経営品質を継続的にかつ革新的に向上しうる能力とスキルを有する高度専門職業人を育成することを目的とします。」とし、そのアドミッションポリシーが、「本研究科が対象とする入学志望者は、技術経営の知識を活かして技術管理者や経営管理者に就こうとする人、技術を活用した経営における価値創造や課題解決に挑もうとする人、将来、事業を継承し、経営の一翼を担おうとする人などです。本研究科は、学部や大学院における専攻分野を問うことなく募集対象を広く開放しています。」とあるように、継続事業体の企画・運営にかかわった大学院であり、経営の専門家を養成するのがMOTである。

このような視点からは、次の経営学固有の特性についても、MOTの趣旨に包含されるものである。

### (2) 経営学固有の特性

経営学は、従来では社会科学の一分野として位置づけられていたが、今日では自然科学の成果も活用した総合科学としての性格が強まっている。そこでは、経営学固有の視点が確立している。

第一の視点は、営利・非営利の継続的事業体を俯瞰的に見る視点であり、「経営者の視点」あるいは「経営主体の視点」と言われるものである。

第二の視点は、組織を構成する各職能の管理者の視点であり、それぞれの職能単位組織の課題を効率的に解決するものである。

**第三の視点は、営利・非営利の継続的事業体の活動を社会全体の発展と関連づけて点検する視点である。営利・非営利の継続的事業体はそれを取り巻く社会と相即的に発展する必要があり、社会秩序全体との整合性を自己点検する必要がある。**

これら3つの視点は、経営品質の基本的な視点と一致し、MOTの理論にとどまらず、実践を重視するMOTの3基準（有用性・実現可能性・学術的価値）にも整合する考え方である。

上述のように、MOTの概念からしても、次に示す日本学術会議が目指す「経営学を学修した者」の能力「経営学を学ぶ学生が身に付けるべき素養」は、基本として身につけなければならない。

### **(3) 経営学を学ぶ学生が身に付けるべき素養**

**経営学を学修した者は、営利・非営利の継続的事業体がどのような論理で、どのような意思決定を行い、どのような結果になったかを理解し、説明することができる。さらに、継続的事業体が直面している諸問題の構造を分析し、それに対処する最適な行動を提示することができる。継続的事業体を実際に管理する知識を身に付け、それを実践できる能力を習得している。**

経営学を学んだ学生が身に付ける専門的能力としては、たとえば、継続的事業体を企画し運営することができる、その資金の流れを把握し、その活動結果を貨幣的に測定することができる、顧客のニーズを把握し、求められる商品を開発することができるなどの諸能力が挙げられる。

このような、「経営学・経営の考え方と身につけるべき資質について」は、当然のことながら、MOT卒業生も身につけているモノと考えている。

したがって、MOTに学ぶ者は、持続的成長に向けた企業・組織の改善・改革を実践する担当者になることを期待している。

以上